

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐の島町港塩口24
電話2-9772

不登校支援体制

島根県の不登校児童生徒数は、平成二十九年以降高い割合が続いている状態です。隠岐管内も少数ながら、一昨年度と比較すると二・三倍となっており、各校苦慮しながら、きめ細かな対応をいただいている状況です。

自立支援

五月に行われた生徒指導主任・主事研修では、各校から持ち寄った不登校支援体制の良さを活かして「理想とする不登校支援体制」をグループで作成しました。各グループで作成された支援体制の要点をまとめると次のようになりました。

未然防止

○実態把握○基本方針の策定と内容の共通理解(教職員、家庭)○学級経営、授業、児童会・生徒会の充実

初期対応

○校内支援委員会によるケース会議と全体共有○支援方針

の共有と連携(学校と家庭)○スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、関係機関との連携

○校内体制の整備と家庭との連携○本人支援(学習支援、自己決定・活躍の場の設定、スマーレスアップの目標設定)

○安心できる居場所づくり、絆づくり○一連の取り組みの検証と継続的支援

教室の空席に胸を痛めておられる先生方、登校しないことでより強く学校を意識している子供と家庭。文部科学省が通知している不登校支援の視点には『「学校に登校すること」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある。』とあります。「学校に登校すること」という結果のみを目標にするのでなければ、どのような目標で支援を考えればよいのか。この視点でケース会議の

園内研修から

乳幼児期の子供たち

去年はコロナ禍のため、保育士が受ける色々な研修も中止となりました。いくつかのリモート研修はできたものの研修機会は減ってしまいました。このような状況にあっても管内の多くの保育所(園)では「保育参観」を行い、保育士同士が互いに保育を見合いそして対話し、自分の保育を振り返る機会を設けました。

乳幼児期は、生活や遊びの中で、興味や関心、欲求に基づいて自ら周囲の環境に関わるといふ直接的な体験を通して、心身が大きく育っていく時期です。そのため、子供一人一人の状況や発達過程を踏まえて、計画的に保育の環境を整え構成しています。

管内でもそれぞれの園が地域で育つ季節の草花、野菜、山菜、木の実等身近な自然物、廃材などを、生活や遊びの中に取り入れています。地域の方に協力していただきながら、野菜や草花を育て、それを収穫してクッキングや遊びに使います。花や野菜を潰して色水に。そこからジュースになったり、ケーキになったり。花をたらいに浮かべて花風呂に。思いつきから色々なごっこ遊びに膨らんでいきます。

四季を通して出かける散歩でも、身近な自然を見つけたり、地域の人と関わったりしていきます。そして、この身近な環境はふるさと教育の入り口にもなります。

乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる重要な時期です。そのため、遊びの中で一人一人の子供に「どのような力が身についたのか」「どういう学びをしているのか」を見取っていきま

す。また、生活や遊びの様子を写真に撮り、その表情や行動から子供たちの気持ちや心の動きを読み取り、よりよい育ちや学びにつなげていける

よう保育を可視化、言語化していく研修を行っています。今年度も、目の前の子供たちの何気ない姿を大切に、保育士等の学びが子供の幸せにつながっていきけるよう保育所(園)と共に研鑽を重ねていきたいと思ひます。

対話の精神

(文責 若林)

就学に関わる相談では、一つのケースに何時間もかけて話し合うときがある。何日もかける場合もある。

長らく子供に関わってきた委員は成長の経過を語る。行動観察の委員は、友だちとの関わりや学びの姿を報告する。検査者は、その子のもつ力を分析する。相談担当は、担任や保護者の思いを伝える。こうした情報をみんなが共有する。

チーム全員で子供の最善の利益のためにあるべき方向を探っていく。子供のくらしと学びに直結する問題であり、結論を安易には出せない。平行線の議論が続く。

そのとき求められるのが「対話の精神」である。対話は「会話」ではない。相手話を「論破」することでもない。

「ここは譲れない。」という自分の見解を持ち、その上で、自分と異なる他者の見解を受けとめ、それぞれの見解を重ね合わせて、新たな合意を生み出すのだ。

議論を深めていくと、気づけなかった子供の新たな内面が見えてくる。受けとめていたつもりであった保護者の喜びや苦悩のより深い思いが見えてくる。

子供の姿や保護者の思いは、私たち一人一人の力量を超えて、多面的で、多様で、奥深い。だから、みんなで粘り強く対話を積み重ね、謙虚に子供観や保護者観を学び直していくしかないのである。

私たちは学ぶ
見知らぬ人の涙から学ぶ
悲しみを分かち合うことの難しさ
私たちは学ぶ
見知らぬ人の微笑みから学ぶ
喜びを分かち合うことの喜びを
(谷川俊太郎『学ぶ』から)

伝えるとは、受け入れるということ、対話するとは学び合うこと、相談の話し合いにわが身をおいて、いつもそう思う。(文責 野津)